

V-V 型複合動詞の自他交替

——形態-統語のミスマッチの観点から——*

前田 宏太郎

キーワード：日本語 複合動詞 自他交替 語彙主義 反語彙主義

本稿は日本語の V-V 型複合動詞の自他交替について議論する。単純和語動詞（例 壊れる／壊す）の自他交替については記述・理論研究ともに数多くの蓄積がある一方、同じ和語動詞でも V-V 型複合動詞の自他交替についてはあまり議論が活発ではない。そこで、本稿は V-V 型複合動詞の自他交替を「形態-統語のミスマッチ」の観点から記述し、理論研究の方針を検討することを目的とする。

1 章では V-V 型複合動詞の自他交替を 3 つの点から観察し、その全体像を示す。2 章では「形態-統語のミスマッチ」を中心に可能な複合動詞の自他ペアについて考察する。そして 3 章で理論研究の方針を検討する。

1. V-V 型複合動詞の自他交替の観察

1 章では、複合動詞の自他交替を議論する上で考慮すべき点を指摘し、最後に形態-統語のミスマッチのパターンを提示する。

1. 1 形態-統語のミスマッチ

V-V 型複合動詞（以下、この意味で「複合動詞」と呼ぶ）の自他交替の議論に入る前に、単純和語の自他交替がどのようなものか確認しておく。単純和語の自他交替は少数の例外（ひらく、とじる等）を除き、自他形態が異なる。

- (1) a. パソコンが壊れた (koware-ru)。
- b. 誰かがパソコンを壊した (kowas-u)。（作例）

(1) において、当然ながら、自動詞形態の「壊れる」は自動詞構文に、他動詞形態の「壊す」は他動詞構文に現れ、これが交差すること（＝自動詞形態が他動詞構文に現れたり、他動詞形態が自動詞構文に現れたりすること）はない。つまり、単純和語の自他交替においては、「形態と統語はマッチ」している。

ところが、複合動詞の場合には形態と統語がマッチするとは限らない。例えば、

- (2) a. 形態：自動詞+他動詞 統語：他動詞
 体を『く』の字に折れ曲げながらも...¹
 (BCCWJ：清水文化『思惑違いの流星豪雨』)
- b. 形態：他動詞+自動詞 統語：自動詞
 じゃばらになって内側に折り曲がる扉は... (BCCWJ：佐藤雅彦『毎月新聞』)

(2a) において、V1 (=複合動詞の前項動詞) の「折れる」は形態的には自動詞であるが、複合動詞「折れ曲げる」は統語的には他動詞である。また、(2b) において、V1 の「折る」は形態的には他動詞であるが、複合動詞「折り曲がる」は統語的には自動詞である。さらに、(2) は V1 において形態-統語がマッチしない例だったが、(3) に示すように V2 において形態-統語がマッチしない例も存在する。

- (3) a. 形態：自動詞+他動詞 統語：自動詞
 (人が) 部屋から飛び出す。(森川, 2016, p.77)
- b. 形態：他動詞+自動詞 統語：他動詞
 [「身」という漢字について] 昔は一番下の横棒「一」が右端の縦棒「丨」を突き出ることはなかった [...]. (<https://okurukotoba.tokyo/archives/7174>)

(3a) において V2 の「出す」は形態的には他動詞であるが、複合動詞「飛び出す」は統語的には自動詞である。また、(3b) において V2 の「出る」は形態的には自動詞であるが、複合動詞「突き出る」は統語的には他動詞である。この種の例は 2.1 節で右側主要部 (Righthand Head Rule) の観点から再度取り上げる。

このように、単純和語とは異なり、複合動詞の自他交替においては、「形態-統語のミスマッチ」と呼べるような例が観察でき、このミスマッチが存在する以上、自他交替という現象を形態レベルと統語レベルで区別して論じる必要がある。² そして、この区別を受け入れることによって、理論的な課題も明確になってくる。この点については 3 章で言及する。

1. 2 自他同形動詞を要素とするとき

前節では形態-統語のミスマッチについて見たが、ミスマッチと指摘できるのは、複合動詞の要素である動詞の自他形態を特定できるからこそである。これに対し、要素となる動詞が自他同形である場合には、ミスマッチが生じているかどうかを見かけだけで判定できない。例えば、「張る」という動詞は以下のように自他同形動詞である。

- (4) a. 冬になると、池に氷が張る。
 b. 冬になると、池が氷を張る。(作例)

そして、「張る」は複合動詞の要素として現れる。

- (5) a. その瞬間、全神経が張り詰めた。(作例)
 b. 彼らは、全神経を張り詰めて、作業をした。(『複合動詞レキシコン』)

形態-統語のミスマッチという現象が存在する以上、(5a) の「張る」の形態は自動詞で、(5b) の「張る」の形態は他動詞であると決めつけられない。また、(5a) の「張り詰める」における「詰める」も形態-統語のミスマッチを起こしている。というのも、「張り詰める」という複合動詞としては統語的に自動詞だが、「詰める」は形態的に他動詞だからである。つまり、「張り詰める」は自他同形の複合動詞である。

以上のように、複合動詞の要素である自他同形動詞の形態的自他性を特定することには困難が伴う。しかし、2.4 節で提示する「複合動詞の自他交替にかかわる制約」を考慮すれば、この種の形態的自他性を考察することは不可能ではないと思われる。

1. 3 語彙的複合動詞と統語的複合動詞

広く知られているように、影山 (1993) は複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2つに分類した。ここでは両者の区別の詳細には立ち入らないが、自他交替は語彙的複合動詞に限った現象とする見方が一般的であるようだ。例えば、複合動詞の自他交替の理論研究である史 (2013, p. 5) は「統語的複合動詞の自他性は V1 から受け継いでいるため、自他交替現象が存在しない [...]」と述べているし、その他の先行研究 (朱, 2009; 陳, 2010; 史, 2015; 日高, 2012; Kageyama, 2018; 陳・松本, 2018) も語彙的複合動詞の自他交替のみを議論の対象としている。しかし、以下で見るように、統語的複合動詞にも自他交替現象は見られる。

まず、自他交替現象が語彙的複合動詞と統語的複合動詞とにまたがる例から見ていく。例えば、

- (6) a. 花子と太郎は友達を誘い合って、パーティに参加した。(作例)
 b. 彼女は友達と (友達を) 誘い合わせて、演劇を見に行った。
 (『複合動詞レキシコン』)

単純和語の自他ペアとして「合う／合わせる」が存在する。そして、自動詞「合う」が (6a) の統語的複合動詞「誘い合う」の V2 として、他動詞「合わせる」が (6b) の語彙的複合動詞「誘い合わせる」の V2 として現れている。つまり、複合動詞のペアとして「誘い合う／誘い合わせる」を捉えると、(6) は語彙的複合動詞と統語的複合動詞との間の自他交替現象と言える。³ 本稿ではこれ以上立ち入らないが、このように両者にまたがる自他交替に対する理論的な説明は行われる必要がある。

また、自他交替現象は統語的複合動詞の中だけでも見られる。国立国語研究所の『複

合動詞レキシコン』に挙げられている統語的複合動詞を見ると、いくつかの自他ペアが確認できる。

- (7) a. 【始動】
 ～かかる/～かける (例 落ちかかる/落ちかける)
 b. 【完了】
 ～終わる/～終える (例 歌い終わる/歌い終える)

また、統語的複合動詞も語彙的複合動詞と同様に形態-統語のミスマッチを起こす。例えば、「落ちかかる/落ちかける」では、どちらも複合動詞としては統語的な自動詞である。

- (8) a. マフラーがハンガーから落ちかかった。
 b. マフラーがハンガーから落ちかけた。(作例)

(8b) において「落ちかける」の V2「かける」は形態的には他動詞である (例 マフラーをハンガーにかける)。したがって、統語的複合動詞「落ちかける」ではミスマッチが生じている。また、V1 においてミスマッチが起こる場合もある。例えば、「食べ残る/食べ残す」は、前者は統語的に自動詞、後者は他動詞である。

- (9) a. おせちが食べ残った。
 b. 私たちはおせちを食べ残した。(作例)

(9a) において「食べ残る」の V1「食べる」は形態的に他動詞である (自動詞が存在しない)。したがって、統語的複合動詞「食べ残る」ではミスマッチが生じている。

以上のように、統語的複合動詞にも自他交替現象は見られ、形態-統語のミスマッチも確認される。

1. 4 複合動詞自他交替のパターン

1 節の最後に複合動詞の自他交替の全体像を提示したい。また、以降の議論では V1 と V2 とともに自他形態を持つ動詞によって構成された複合動詞のみを対象とする。

まず、V1 と V2 がそれぞれ自他形態を持つため、論理的には以下のように 4 通りの形態的自他の組み合わせがあり得る。

- (10) 形態的自他の組み合わせパターン
 a. 自+自
 b. 自+他
 c. 他+自

d. 他+他

(10a) と (10d) の形態を持つ複合動詞がそれぞれ自動詞構文、他動詞構文に現れた場合には、形態-統語がマッチしているが、(10b) と (10c) の形態を持つ複合動詞は、いずれの構文に現れたとしても、V1 か V2 のどちらかは形態-統語のミスマッチを引き起こす。なお、「折れる／折る」と「曲がる／曲げる」の複合は、以下のように (10) の全4パターンに該当する。

- (11) a. 竜巻で鉄塔が折れ曲がった。 (『複合動詞レキシコン』)
 b. 身体を『く』の字に折れ曲げながらも [...]。 (= (2a))
 c. じゃばらになって内側に折り曲がる扉は [...]。 (= (2b))
 d. 私は本のページを折り曲げた。 (『複合動詞レキシコン』)

さらに、自他の「交替」に目を向けると、複合動詞の自他交替現象がいかに複雑なものであるかがわかる。(11) のように4通りの形態的自他のパターンがあるということは、形態的自他交替は論理的に6通りあることになる。

- (12) a. 形態：自+自 (10a) ↔ 自+他 (10b)
 例 折れ曲がる／折れ曲げる (自他)、乗り上がる／乗り上げる (自自)
- b. 形態：自+自 (10a) ↔ 他+自 (10c)
 例 折れ曲がる／折り曲がる (自自)、切れ込む／切り込む (自自)
- c. 形態：自+自 (10a) ↔ 他+他 (10d)
 例 折れ曲がる／折り曲げる (自他)、寄りつく／寄せつける (自他)
- d. 形態：自+他 (10b) ↔ 他+自 (10c)
 例 折れ曲げる／折り曲がる (他自)、折れ返す／折り返る (自自)
- e. 形態：自+他 (10b) ↔ 他+他 (10d)
 例 折れ曲げる／折り曲げる (他他)
- f. 形態：他+自 (10c) ↔ 他+他 (10d)
 例 折り曲がる／折り曲げる (自他)

さらに、各具体例の右側の括弧内で示しているように、形態的自他交替パターンと統語的自他交替パターンは必ずしも一対一に対応するわけではない。例えば (12a) を見ると、形態的には「自+自」と「自+他」のV2における交替であるが、「折れ曲がる／折れ曲げる」は統語的には自他の交替、「乗り上げる／乗り上がる」は自自の(非)

交替である。したがって、形態的自他交替のパターンに統語的自他交替を加えると、複合動詞の自他交替パターンは全部で 24 通りになる(形態的自他交替 6 通り×統語的自他交替 4 通り (自自、自他、他自、他他) の計 24 通り)。

		統語的自他交替			
		i. 自↔自	ii. 自↔他	iii. 他↔自	iv. 他↔他
形態的自他交替	a. 自自↔自他	乗りに上がる 乗りに上げる	折れ曲がる 折れ曲げる	?	?
	b. 自自↔他自	折れ曲がる 折り曲がる	(崩れかかる 崩しかかる)	?	?
	c. 自自↔他他	?	折れ曲がる 折り曲げる	?	?
	d. 自他↔他自	折れ返す 折り返る	(崩れかける 崩しかかる)	折れ曲げる 折り曲がる	?
	e. 自他↔他他	?	(崩れかける 崩しかかる)	?	折れ曲げる 折り曲げる
	f. 他自↔他他	?	折り曲がる 折り曲げる	?	(崩しかかる 崩しかかる)

表 1 形態的自他交替と統語的自他交替の組み合わせ

網掛け部分は形態-統語のミスマッチを表している。c-ii 以外は V1V2 のどこかでミスマッチが必ず生じる。また、丸括弧は統語的複合動詞でしか用例を発見できなかったもの、「?」は管見の限りでは用例が発見できなかったものを表している。但し、c-i、e-i、f-i の例については 2 章で言及する。

表 1 の空白の埋まり具合に注目してみると、タイプ ii には空白がなく、次いでタイプ i、タイプ iv と続き、最も空白があるのがタイプ iii となっている。このような分布になるのは偶然ではないと思われる。2 章では、右側主要部の規則、形態-統語のミスマッチ、形態-統語自他性の偏りの 3 つの観点からこの分布について考察していく。

2. V-V 型複合動詞の自他ペアにおける語形成の制約

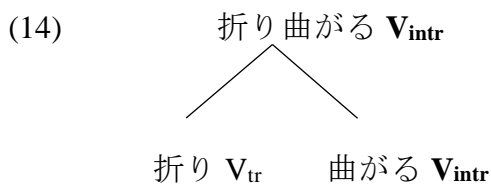
2 章からやや理論的な議論に入っていく。とはいっても、新しい理論的な提案を試みるのではなく、すでに提案されている語形成上の制約や形態-統語のミスマッチを考慮すると、先の複合動詞自他交替の分布が自ずと理解できることを確認する。

2. 1 右側主要部の規則

右側主要部の規則（以下、RHR）とは、次のような規則である。

(13) [T]he head of a morphologically complex word [is] the righthand member of that word. (Williams, 1981, p. 248)

これを V-V 型複合動詞に当てはめて考えると、V2 がその複合動詞全体における主要部（Head）ということになる（影山, 1993, p. 124; 由本, 2005, p. 143）。



言い換えると、V2 の自他性が複合動詞全体の自他性を決定する。そして、この規則は複合動詞の語形成上の強力な制約として機能していると思われる。以下の表は、RHR に違反しているタイプを明示したものである。

		統語的自他交替			
		i. 自↔自	ii. 自↔他	iii. 他↔自	iv. 他↔他
形態的自他交替	a. 自自↔自他	✓		✓	✓
	b. 自自↔他自		✓	✓	✓
	c. 自自↔他他	✓		✓	✓
	d. 自他↔他自	✓	✓		✓
	e. 自他↔他他	✓	✓	✓	
	f. 他自↔他他	✓		✓	✓

表2 右側主要部の規則に違反するタイプ

先ほどの表 1 と見比べてみると、「?」及び統語的複合動詞と「✓」がほとんど一致することがわかる。つまり、RHR に違反するような語彙的複合動詞は基本的に存在しない。となると、違反しているにもかかわらず自他ペアとして存在している、a-i 「乗り上がる／乗り上げる」と d-i 「折り返す／折り返る」をどう扱うべきか考える必要があるであろう。

RHR 違反というのは本稿で扱っている形態-統語のミスマッチの一種である。V1 で生じるミスマッチではなく、V2 で生じるミスマッチこそが複合動詞形成の不可能性を

決定しているように見える。

2. 2 形態-統語のミスマッチ

今度は、形態-統語ミスマッチの数の分布を見ていく。

		統語的自他交替			
		i. 自↔自	ii. 自↔他	iii. 他↔自	iv. 他↔他
形態的自他交替	a. 自自↔自他	<u>1</u>	1	<u>3</u>	<u>3</u>
	b. 自自↔他自	1	<u>1</u>	<u>3</u>	<u>3</u>
	c. 自自↔他他	<u>2</u>	0	<u>4</u>	<u>2</u>
	d. 自他↔他自	<u>2</u>	<u>2</u>	2	<u>2</u>
	e. 自他↔他他	<u>3</u>	<u>1</u>	<u>3</u>	1
	f. 他自↔他他	<u>3</u>	1	<u>3</u>	<u>1</u>

表3 形態-統語のミスマッチ：タイプ別の数

タイプ i と iv、タイプ ii と iii とで対照である。下線はミスマッチに RHR 違反が含まれることを表している。尚、V1V2 で構成される複合動詞の自他ペアにおいて、ミスマッチの最大値は4 (=タイプ c-iii)、最小値は0 (=タイプ c-ii) であり、ミスマッチが3以上の場合には必ず RHR 違反を犯している (=タイプ e-i、f-i、a-iii、b-iii、e-iii、f-iii、a-iv、b-iv)。そして、ミスマッチが3以上の複合動詞の自他ペアは、語彙的複合動詞、統語的複合動詞にかかわらず存在しない。ただし、2.3 節で言及する自動詞としての「折り返す」を認めると e-i、f-i は存在することになる。

ここで注目したいのは、ミスマッチが1つでその1つが RHR 違反の a-i 「乗りが上がる／乗り上げる」と、ミスマッチが2つでそのうち1つが RHR 違反の d-i 「折り返す／折り返る」である。これらが複合動詞の自他ペアとして存在するのであれば、a-i のように「ミスマッチ1、RHR 違反1」である b-ii、e-ii、f-iv も存在していても良さそうであるし、d-i のように「ミスマッチ2、RHR 違反1」である c-i、c-iv、d-iv も存在していても良さそうである。⁴ 次にこの両者を分ける要因について考えてみたい。

2. 3 形態-統語自他性の偏り

可能なペア (a-i 及び d-i) と不可能なペア (b-ii、e-ii、f-iv 及び c-i、c-iv、d-iv) とを分ける要因を探る手掛かりの1つとして、形態的自他が統語的自他を表すときの偏

りが考えられる。この偏りとは、形態-統語のミスマッチの中でも「V2 が形態的自動詞で統語的他動詞を表すこと」よりも「V2 が形態的他動詞で統語的自動詞を表すこと」の方が好まれるということである。

		統語的自他交替			
		i. 自↔自	ii. 自↔他	iii. 他↔自	iv. 他↔他
形態的自他交替	a. 自自↔自他	他→自			
	b. 自自↔他自		*自→他		
	c. 自自↔他他	(*)他→自			*自→他
	d. 自他↔他自	他→自			*自→他
	e. 自他↔他他		(*)他→自		
	f. 他自↔他他				*自→他

表 4 形態的自他性と統語的自他性の組み合わせの偏り

RHR 違反を犯しているにもかかわらず可能なペアであるタイプ a-i と d-i は「他→自」、すなわち、V2 が形態的他動詞で統語的自動詞を表す複合動詞を持つ。それに対し、不可能なペアである 6 つのタイプのうち、b-ii、c-iv、d-iv、f-iv の 4 タイプは「自→他」、すなわち、V2 が形態的自動詞で統語的他動詞を表す複合動詞を持つ。したがって、RHR 違反を犯していても、それが「他→自」というミスマッチであれば可能な複合動詞であり、「自→他」であれば容認されない。

このようにまとめると、表 4 において「(*)」がついているタイプ c-i と e-ii の用例が予測される。実際、タイプ c-i に該当する「折れ返る／折り返す」は、その数は多くないものの web 上でいくつか確認できる。

(15) a. [...] 通肩で襟が折れ返る(?) ようなやつ。

(<https://twitter.com/surugajouken/status/1376029905624829953>)

b. [...] 頭部に剛毛をもち、口腔内に歯をまったくもたず、卵巣が折れ返ることが特徴。(BCCWJ : 宍田 幸男『日本産土壌動物検索図説』)

c. このような部分で凹領域では、映像が折れ返る。(渡辺ら, 1994, p. 380)

(16) a. ネイビーとホワイトのボーダーで襟が折り返す感じになっていて可愛いです! (<https://jp.mercari.com/item/m53454046782>)

b. ま、カメラの先端が腸が折り返す部分に当たったときに、[...]

(<https://okwave.jp/qa/q6749471.html>)

- c. こうしておけば、どんなテキストが **th** に入ったとしても、**th** はそれらが収まるように伸縮し、テキストが折り返すことはありません。

(<https://www.codegrid.net/articles/2016-responsive-text-1/>)

(15) は自動詞「折れ返る」、(16) は自動詞「折り返す」の例で、a-c それぞれが交替のペアである。^{5,6}

また、タイプ e-ii に該当する「乗上げる／乗せ上げる」の用例も確認できる。但し、(17) に見るように他動詞「乗せ上げる」に対応する自動詞「乗上げる」は必ずしも容認されるわけではない。

- (17) a. 赤ちゃんがお腹に {?乗上げる／乗上げてくる}。
b. 自転車がレールの上に乗上げる。
c. {*パソコン／ルンバ} が円台上に乗上げる。(作例)

- (18) a. 背中に乗せ上げるあれこれ [...] 乗せ上げる肩は利き腕側が良いか? [...] とりあえず赤ちゃんを半分乗せ上げて [...] パワフルなママは、何も考えずにサッと乗せ上げちゃいます。

(<https://onbonbonb.blogspot.com/2020/11/20201115.html>)

- b. 平置き駐輪場でも、切り返しスペースがなく自転車を持ち上げて動かすので腕力が必要。さらに、レールの上に乗せ上げるタイプは最悪。

(<https://ikuji.oyasmilk.com/ninshin/dendo-jitensha-abunai/>)

- c. 円滑にプログラムを進行させるため、「発表者ツール」の使用ならびに舞台上にパソコンを乗せ上げることはできません。

(https://www.jkop.jp/for_speakers.php)

これらの例は筆者自身も容認度はそこまで高いと判断できなかつたため、表 1 には含めなかつた。しかし、以下のように「自→他」のミスマッチを起こしているようなものと比べると、やはり比較的容認できるように思われる。

(19) タイプ b-ii

- a. 竜巻で鉄塔が折れ曲がった。(= (11a))
b. *私は本のページを折り曲がった。(cf. (11d))

(20) タイプ c-iv

- a. *私は本のページを折れ曲がった。(cf. (11d))
b. 私は本のページを折り曲げた。(= (11d))

(21) タイプ d-iv

- a. 身体を『く』の字に折れ曲げながらも [...]. (= (11b))

b. *私は本のページを折り曲がった。(cf. (11d))

(22) タイプ f-iv

a. *私は本のページを折り曲がった。(cf. (11d))

b. 私は本のページを折り曲げた。(= (11d))

2. 4 まとめ：複合動詞の自他交替にかかわる制約

2章は、論理的に導かれる複合動詞の自他交替 24 パターンについて、右側主要部の規則、形態-統語のミスマッチ、形態-統語自他性の偏りの 3 つの観点から整理を行った。これを複合動詞の自他交替における制約として、以下のようにまとめておく。

(23) 複合動詞の自他交替にかかわる制約：

ある複合動詞の自他ペア、 $V1V2 \leftrightarrow ViVii$ について、 $V1V2$ もしくは $ViVii$ の少なくとも一方が、①右側主要部の規則に違反し、かつ、②その違反が形態的自動詞で統語的他動詞を表すタイプの形態-統語のミスマッチである場合、そしてその場合のみ、そのような $V1V2 \leftrightarrow ViVii$ は容認されない。

逆にいえば、右側主要部の規則に反しないのであれば容認され、仮に違反したとしてもその違反が形態的他動詞で統語的自動詞を表現するタイプの形態-統語のミスマッチであれば容認されうる、ということになる。⁷

また、(23) の制約は、1.2 節で取り上げた自他同形動詞を要素に含む複合動詞の自他ペアについて示唆的である。 $V1$ における形態的自他性は複合動詞の自他ペアの成立可能性に影響を与えないため、(5) の「張り詰めた／張り詰めた」における「張る」の形態的自他性は特定されなくても良いことになる。

3. 理論研究に向けて

冒頭でも述べた通り、本稿の目的は理論研究に向けて複合動詞の自他交替を形態-統語のミスマッチという観点から記述することである。したがって、本稿が行った記述をもとに今後どのように理論研究に発展させていくべきかを検討するために、3章では、先行研究を概観し、それらの議論が本稿の記述とどのようにかかわるのか考えてみたい。

複合動詞の自他交替についての理論的な研究の多くは、分析の方法に多少の相違はあるものの、他動詞の複合動詞からの自動詞化によって、対応する自動詞の複合動詞が形成されると主張している（朱，2009；陳，2010；日高，2012；史，2013，2015；Kageyama, 2018；陳・松本，2018）。これは単純和語自他交替の理論研究からの援用と言える（影山，1996 など）。例えば、史（2013）は、以下のような自他交替可能な複合動詞のペアを列挙した上で、

- (24) a. 打ち上げる／打ち上がる、繰り上げる／繰り上がる、繰り下げる／繰り下がる、切り替える／切り替わる...
- b. 貼り付ける／貼り付く、巻き付ける／巻き付く、刻み付ける／刻み付く、吊り下げる／吊り下がる、編み上げる／編み上がる、売り切る／売り切れる、煮詰める／煮詰まる...
- c. 当てはめる／当てはまる、折り曲げる／折り曲がる、積み重ねる／積み重なる、付け加える／付け加わる、折り重ねる／折り重なる...

(史, 2013, pp. 107-108, p. 111)

(24a) は V1 の意味が希薄化 (Bleaching) し、V2 が表す結果にのみ焦点が当たることによって自動詞化が可能、(24b) は V2 の意味が希薄化し、V2 が V1 の持つ結果を強調することで、結果にのみ焦点が当たり自動詞化が可能、(24c) は V1 と V2 のどちらも結果しか持たないため、結果にのみ焦点が当たることによって自動詞化が可能、と説明している。つまり、V1V2 の相対的な結果の焦点化が他動詞の複合動詞の自動詞化に重要だ、という主張である。その他の先行研究も分析の方法に多少の相違は見られるものの、動詞の意味構造内において結果を重要視する点は共通しており、また、説明対象としている複合動詞のペアもほとんど (24) と一致している。

では、ここに挙がっている複合動詞のペアは本稿が提示したタイプのどこに該当するだろうか。本稿では V1V2 とともに自他形態を持つもの限定しているため、「打ち上げる／打ち上がる」などのペアは対象外となるものの、それ以外は全てタイプ f-ii、すなわち、形態的自他交替が「他自↔他他」、統語的自他交替が「自↔他」に限られる。⁸ また、対象外となる複合動詞ペアにおいても V1 がいずれも他動詞（もしくは「巻く」のように自他同形動詞）であり、タイプ f-ii と見なしてよいかもしれない。

つまり、多くの先行研究が対象としている複合動詞の自他ペアはタイプ f-ii に限定されており、本稿で存在の可能性を示唆したその他のタイプ a-i、a-ii、b-i、c-i、c-ii、d-i、d-iii、e-i、e-ii、e-iv、f-i は対象とされてこなかった。もちろん、V2 の自動詞化という考えは、f-ii だけでなく、a-ii の分析にも直ちに適用可能であるが、その他のタイプにはそのままでは応用できない。したがって、複合動詞の自他交替の理論研究の 1 つの方向性としては、V2 の自動詞化では説明できないタイプについても何らかの説明を施す、ということになるだろう。⁹

そのようなタイプの中でも、RHR 違反を犯しているタイプ a-i、c-i、d-i、f-i に注目することで、理論研究の方向性を考えたい。¹⁰

- (25) タイプ a-i 形態：自自↔自他 統語：自↔自
例 乗り上がる／乗り上げる、こぼれ出る／こぼれ出す

(26) タイプ c-i 形態：自自↔他他 統語：自↔自
例 折れ返る／折り返す

(27) タイプ d-i 形態：自他↔他自 統語：自↔自
例 折れ返す／折り返る

(28) タイプ f-i 形態：他自↔他他 統語：自↔自
例 折り返る／折り返す

例えば、「乗り上がる／乗り上げる」は V2 同士が形態的自他交替を起こしているにもかかわらず、複合動詞全体としての統語的自他性は変化が起きていない。つまり、ここで挙げられている例はいずれも、V2 の形態的自他性が統語的自他性に影響を与えないペアといえる。この点は理論研究を進める上で重要だと思われる。

先に紹介した先行研究の多くは語彙主義的(Lexicalist)なアプローチをとっており、観察対象が f-ii に限定されていることにも反映しているように、形態-統語のミスマッチという観点ではなく、「形態と統語はマッチしている」という前提で複合動詞の自他交替を議論している。¹¹ 語彙主義的立場を維持したまま (25)-(28) のような例を説明するには、理論的な道具立て(例 語彙規則(Lexical rule)、語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)や事象構造(Event Structure))に変更や修正を加えるか、もしくは、複合動詞自他交替の主なメカニズムはあくまでも自動詞化であり、以上の例は別の語形成プロセスを経たものだと説明する必要があると思われる。

対して、本稿は反語彙主義的なアプローチである分散形態論(Distributed Morphology: Halle and Marantz, 1993)の枠組みが形態-統語のミスマッチを捉えるのに適していると考えられる。先に見た語彙主義的な理論研究と異なり、分散形態論では項構造は統語構造内に実現され、また、音形は出来上がった統語構造が形態操作を経た後に付与されると仮定される(Harley and Noyer, 1999)。図1に即して言い換えると、List Aにある形態統語素性(Morphosyntactic Features)が統語操作(Syntactic Operations)の対象となり統語構造が組み上がる。この時点で項構造も完成しているため、複合動詞の統語的自他性は決定している。その後、形態音韻操作(Morphological Operation)を経てList Bからの語彙挿入が生じる音声形式(Phonological Form)にて最終的な音形(本稿でいう形態的自他性に対応)が決定する。つまり、形態-統語のミスマッチに該当する(25)-(28)の例も、項構造(もしくは統語構造)を構築する段階では何のミスマッチも起こさず、音形が付与される語彙挿入の段階で初めてミスマッチが生じることになる。具体的な分析は現段階では提示できないが、複合動詞を構成する語根(Root)の局所性(Locality)に基づいた語彙挿入規則を仮定することなどが考えられる。

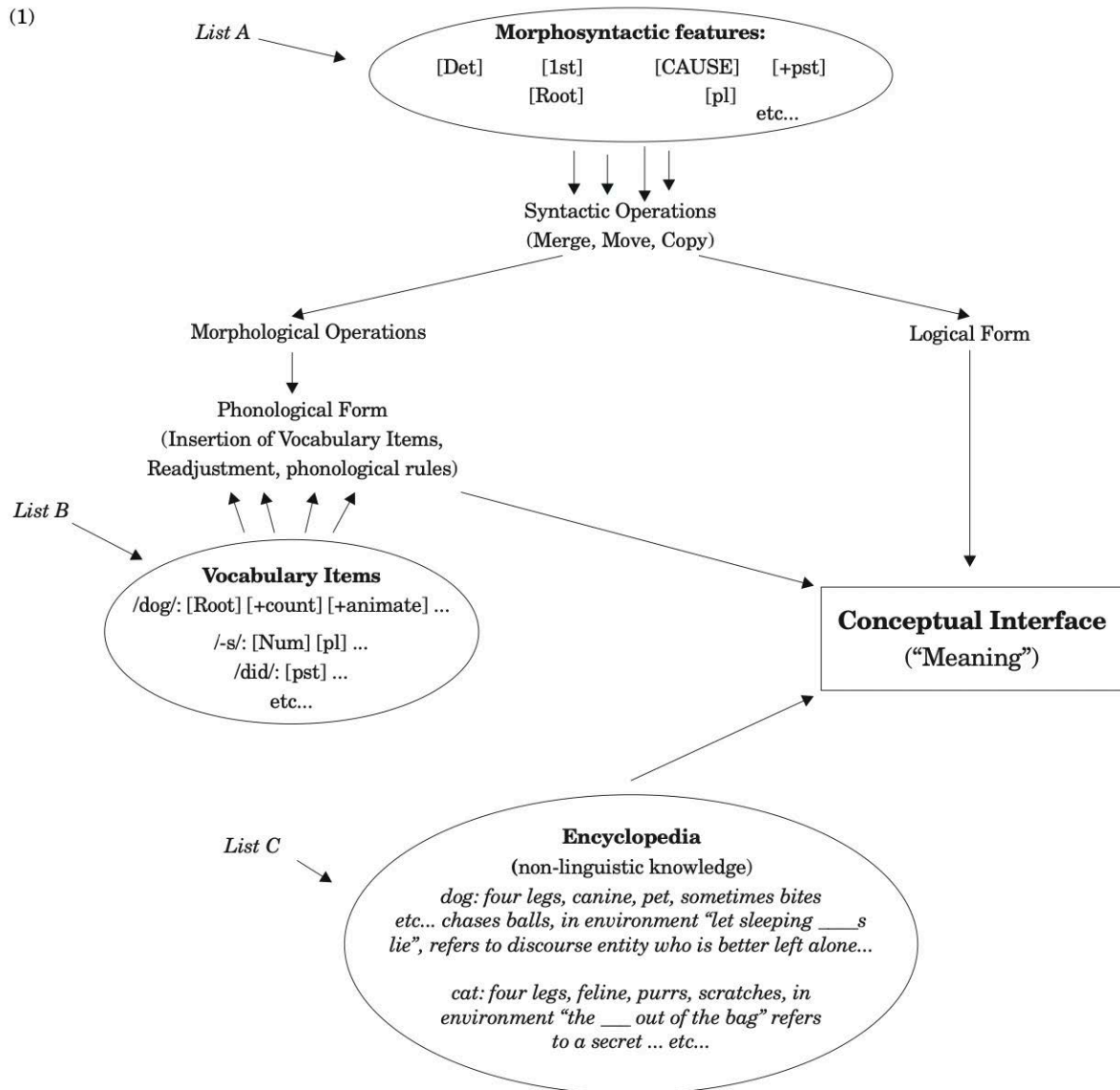


図1 分散形態論の概観 (Harley and Noyer, 1999, p. 3)

もちろん、このように想定したところで、そもそもなぜミスマッチが生じるのかという問題が解消されるわけではないが、少なくとも形態-統語がマッチしている前提で複合動詞の自他交替を議論している多くの語彙主義的アプローチよりもどの段階でミスマッチが生じるかという点では見通しが良いように思える。¹² とはいえ、本稿では具体的な構造を提案するといった詳細な分析にまで立ち入ることができなかった。この点を今後の課題としたい。¹³

注

* 本稿の内容は、2021年2月27日の伊藤組（オンライン）での発表（「複合動詞の自他交替について」）に基づく。その際に有益なコメントを下された伊藤組のメンバーの皆さま及び草稿に目を通し助言を下された兼元美友氏に感謝申し上げます。

¹ 以下、例文内の下線部は全て筆者によるもの。

- ² 「形態-統語のミスマッチ」と同様の現象について、特定の語彙項目に絞って観察を行なっている杉村 (2009) などがある。
- ³ この他の両者にまたがる例として、「燃え尽きる／燃え尽くす」「降り続く／降り続ける」などがある (尽きる)「続く」は語彙的複合動詞の V2、「尽くす」「続ける」は統語的複合動詞の V2)。
- ⁴ d-ii はミスマッチ 2、RHR 違反 2。
- ⁵ (15)、(16)において、共起している名詞が共通しているのは a のみで、b と c は完全な交替の例とは言えない。
- ⁶ ここでは自動詞「折り返す」が問題となっているが、形態的ミスマッチが生じていない自動詞「折れ返る」が容認しにくいという問題もある。
- ⁷ 2.3 節で考察したこの偏りについては、部分全体関係 (Mereology) の観点から意味・語用論的分析が可能かもしれない (cf. 前田, 2020)。
- ⁸ 陳・松本 (2018: 230) は使役化プロセスを分析しており、ここで挙げたその他の先行研究とは一線を画すが、挙げられている例はいずれもタイプ f-ii である。使役化については日高 (2013) も参照。
- ⁹ さらに c-ii のように複合動詞のペアどちらもが形態-統語のミスマッチを犯していない、言ってみれば最も「普通」に見える複合動詞のペアが V2 の自動詞化では説明されない点は注目に値する。
- ¹⁰ 語彙的複合動詞の全てに目を通してはいないため、当然ながらこの他にも複合動詞の自他ペアは存在すると思われる。
- ¹¹ ここでの「語彙主義」は「項構造 (Argument Structure) が統語構造より前 (pre-syntactically) にレキシコンからのアウトプットによって構築されると想定すること」という意味合いで用いている。
- ¹² 分散形態論による複合動詞の分析は Nishiyama (1998, 2008) など既に行われているが、形態-統語のミスマッチに焦点を当てたものは管見の限り見当たらない。
- ¹³ また、本稿は複合動詞の自他ペアに注目したが、複合動詞全体の語形成に対する様々な提案 (多動性調和の原則 (影山, 1993, p. 117)、主語一致の原則 (松本, 1998, p.72)、非対格優先の原則 (由本, 2005, p. 144) など) とどのように関係するかも検討したい。

参考文献

1. 陳劫憚. (2010). 「語彙的複合動詞の自他交替と語形成」『日本語文法』10 (1), 37-53.
2. 陳奕廷・松本曜. (2018). 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論』東京：ひつじ書房.
3. Halle, Morris., & Alec Marantz. (1993). Distributed morphology and the pieces of inflection. In Ken Hale and Samuel Jay Keyser (Eds.), *The view from building 20*, (pp. 111-176). Cambridge, MA: MIT Press.
4. Harley, Heidi., & Rolf Noyer. (1999). Distributed morphology. *Glott international* 4 (4), 3-9.
5. 日高俊夫. (2012). 「語彙的複合動詞における反使役化と脱使役化」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』2 (2), 115-130.
6. 日高俊夫. (2013). 「語彙的複合動詞の他動詞化・再帰化」近畿大学教養・外国語教育センター紀要』3 (2), 81-96.
7. 影山太郎. (1993). 『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
8. 影山太郎. (1996). 『動詞意味論：言語と認知の接点』東京：くろしお出版.
9. Kageyama, Taro. (2018). Agents in anticausative and decausative Compound Verbs. In Taro Kageyama and Wesley Jacobsen (Eds.), *Transitivity and valency alternations: Studies on Japanese and beyond*, (pp. 89-124). Berlin: De Gruyter Mouton.
10. 前田宏太郎. (2020). 「非対格他動詞としてのラス形」[Morphology and Lexicon Forum 2020 発表資料].
11. 松本曜. (1998). 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-83.

12. 森川文弘. (2016). 「日本語の複合動詞『～出す』の自他交替について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』 29, 77-90.
13. Nishiyama, Kunio. (1998). V-V compounds as serialization. *Journal of East Asian linguistics* 7, 175-217.
14. Nishiyama, Kunio. (2008). V-V compounds. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (Eds.), *The oxford handbook of Japanese linguistics*, (pp. 320-347). New York: Oxford University Press.
15. 史曼. (2013). 『事象構造による日本語複合動詞の自他交替の分析』 博士論文.
16. 史曼. (2015). 「語彙的複合動詞の自他交替について」由本陽子・小野尚之 (編) 『語彙意味論の新たな可能性を探って』 (pp. 130-156). 東京: 開拓社.
17. 杉村泰. (2009). 「日本語複合動詞にみる自発的非対称性の破れ」『論集: 異文化としての日本』 113-122.
18. Williams, Edwin. (1981). On the notions “lexically related” and “head of a word.” *Linguistic inquiry* 12 (2), 245-274.
19. 渡辺由美子・斉藤剛・東正毅. (1994). 「曲面稜線による自由曲面形状の解析: 映像稜線の導入とその性質」『情報処理学会第49回全国大会講演論文集』 379-380.
20. 由本陽子. (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語: モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 東京: ひつじ書房.
21. 朱春日. (2009). 「複合動詞の自他対応について: 派生に基づく対応を中心に」『世界の日本語教育』 19, 89-106.

データベース

1. 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp>
2. 国立国語研究所『複合動詞レキシコン』 <https://vlexicon.ninjal.ac.jp/db/>

(前田 宏太郎 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 助教)
2022年1月31日受理 2022年2月5日採録決定